

本学経済学科学生の成績と入試類型との関連性について

経済学部教授 原田善教

1. はじめに

「大学淘汰の時代」とか「大学冬の時代」と言われている。18歳人口の減少に伴い当初予想されていた「大学全入」の時は、2009年から2007年に早まるとされた。そうした中で、各大学ともいかに学生を確保するかということに苦勞しながら様々な工夫がなされているものの、現実には学生定員の確保に重点を置いた結果、学生の知的レベル（生活レベルも含めて）の著しい低下が進んでいる。ある意味では小学校13年生とでも言える状況がみられる。

そこで、経済学科ではまず入口の検討から始めることにした。つまり、従来あまり検討されることのなかった入試類型と学生の成績の関係について調査してみたのである。このことは、学生がどのような入試によって入学したかということとその後の成績とを結びつけて、今後の入試のあり方を検討する材料にするためであった。本稿ではその調査結果を報告する。なお、調査対象は昼間主コース学生に限定している。*

2. 入試類型

従来の入試類型は一般入試と推薦入試に大別され、推薦入試には、キリスト者推薦、学業推薦、スポーツ推薦、TG（付属高校）推薦の4種類があった。

2000年度入試改革では、新たにAO入試が導入されるとともに、一般入試が2回（前期、後期）行われることになった。さらに、一般入試（前期）の合否判定方式が変更された。従来、一般入試は、試験科目3科目の合計得点の上位から合格者を選抜する方法を採っていたが、2000年度入試よりA方式とB方式という2つの選抜方法が導入された。A方式とは従来通り3科目の合計点による選抜方式であるが、B方式は得点の高い2科目の合計点による選抜方式である。そして、A方式とB方式の合格者の割合を3：1（75%：25%）とすることにした。この方式の導入の意図は明確ではないが、実質的に学生数の確保を意図したと思われるものの、名目的には1科目でも特に秀でた資質を有した学生を入学させることにあったと推察される。以上に基づく経済学科の定員は表1に、2000年度以降の入試類型ごとの実際の入学者数および各比率は表2に示しておいた。

表1と表2を比較してすぐに気づくことは、定員と比べて実際の入学者数が非常に多いことである。定員に対する水増し率は、2000年度1.46倍、2001年度1.26倍、2002年度1.27倍、2003年度1.36倍となっている。大学としては入学者数を定員の1.2倍としているが、合格者の歩留まり率の読み違いという点

*入試類型別の入学者のデータや成績データの取得に関しては、入試課と教務課の協力を感謝したい。ただ、デジタルベースでのデータ供与を拒否されたので、データ加工に大きな手間がかかったことを付記しておきたい。

を考慮しても、経済学科が学生数という点でみて全学的に大きな負担を強いられていることは明らかである。参考のため、2003年度と2004年度の各学部各学科の入学者数および水増率の一覧を示しておく。

表1 経済学科（昼間主コース）の定員と比率

定員	一般入試		A O入試	推薦入試			
	前期	後期		キリスト者	学業	スポーツ	T G
475	245	10	51	5	75	39	50
100%	51.6	2.1	10.7	1.1	15.8	8.2	10.5

表2 実際の入学者数（人数・%）

		2000年度入学		2001年度入学		2002年度入学		2003年度入学		
一般入試	前期	A方式	268	38.6	227	37.8	242	40.0	271	41.9
		B方式	164	23.6	128	21.2	145	24.0	151	23.3
	後期		26	3.7	23	3.8	11	1.8	7	1.1
推薦入試	A O	59	8.5	78	13.0	79	13.1	74	11.4	
	学業	74	10.7	68	11.3	67	11.1	66	10.2	
	スポーツ	43	6.2	39	6.5	39	6.5	40	6.2	
	T G	60	8.6	38	6.3	21	3.5	38	5.9	
総計		694	100.0	601	100.0	604	100.0	647	100.0	

参考表 各学部各学科の定員と入学者数・水増率（倍）

学部	学科	定員	2003年度 入学者数	水増率	2004年度 入学者数	水増率	2年度分 合計	水増率 (平均)
文学部	英文（昼）	300	333	1.11	392	1.31	725	1.21
	英文（夜）	50	45	0.90	51	1.02	96	0.96
	キリスト教	10	8	0.80	6	0.60	14	0.70
	史学	200	221	1.11	273	1.37	494	1.24
	小計	560	607	1.08	722	1.29	1329	1.19
経済学部	経済（昼）	475	607	1.36	586	1.23	1193	1.26
	経済（夜）	120	120	1.00	120	1.00	240	1.00
	経営（昼）	275	377	1.37	346	1.24	723	1.31
	経営（夜）	60	67	1.12	73	1.22	140	1.17
	小計	930	1211	1.29	1125	1.20	2336	1.26
法学部	法律	325	382	1.18	407	1.25	789	1.21
教養学部	人間科学	70	80	1.14	86	1.23	166	1.19
	言語文化	70	82	1.17	85	1.21	167	1.19
	情報科学	60	72	1.20	84	1.40	156	1.30
	小計	200	234	1.17	255	1.28	489	1.22
工学部	機械創成	120	124	1.03	149	1.24	273	1.14
	電気情報	120	135	1.13	150	1.25	285	1.19
	物理情報	80	89	1.11	82	1.03	171	1.07
	環境土木	120	142	1.18	137	1.14	279	1.16
	小計	440	490	1.11	518	1.18	1008	1.15
総合計		2455	2924	1.19	3027	1.23	5951	1.21

次に、表2からA方式、B方式による入学者の比率をみてみよう。各年度の入学者のA方式、B方式の比率は表3に示しておいた。A方式とB方式の入学者の比率は合格者の選抜の際には3：1（75%：25%）であり、それに基づいて判定も行われていたのだが、実際の入学者数の比率はそれとは大きく異なり、3：2ともいうべき状況となっている。このことはB方式の合格者の歩留まり率が高いことを示している。さらにここで具体的データを示すことはできないが、合格者の分布状況を見てみると、B方式の合格者はA方式の合格者の合格ライン以下に多数分布していた。ここからB方式の入学者のその後の成績が期待できないことが予測される。そこで、以下では各入試類型に基づく成績調査の結果を見ることにしよう。

表3 A方式、B方式の入学者数とその比率（人数・%）

	A方式		B方式		計
2000年度入学者	268	62.0	164	38.0	432
2001年度入学者	227	63.9	128	36.1	355
2002年度入学者	242	62.5	145	37.5	387
2003年度入学者	271	64.2	151	35.8	422

3. 入試類型別成績調査

2002年度、2003年度に関して成績調査を行った。教務課の協力を得て、各年度後期開始時点の成績を対象とし、その内容は、学生が取得した単位の点数の平均点を序列化したものである。このデータは学生部が特待生、優等生の判定資料として利用しているものである。厳密に言えば、学生によって単位取得科目数や科目の相違があり、データとしての信頼性に問題があるものの、一定程度状況を示すものとして利用可能であると判断し利用した。経済学科の学生数は先も述べたように1学年600名を越えるので、ここでは上位100名、下位100名に絞って入試類型別に成績調査を行った。詳細は表4、表5に示されている。なお、上位100名、下位100名の合計欄の比率（%）は、左欄が各類型者に占める比率を、右欄は全体に占める比率を示している。なお、比率は小数第2位を四捨五入している。

表4 2002年度の学年別成績（人数・%）

2000年度入学 (3年生)	上位100名					下位100名				
	1～ 50位	51～ 100位	計	比率		最下位 50名	計	比率		
				類型別	全体			類型別	全体	
A方式	21	24	45	16.8	6.5	21	19	40	14.9	5.8
B方式	9	8	17	10.4	2.4	10	16	26	15.9	3.7
後期	4	2	6	23.1	0.9	2	4	6	23.1	0.9
A O	5	8	13	22.0	1.9	1	2	3	5.1	0.4
学業	11	7	18	24.3	2.6	2	0	2	2.7	0.3
スポーツ	0	0	0	0	0	8	3	11	25.6	1.6
T G	0	1	1	1.7	0.1	6	6	12	20.0	1.7

経済学科学生の入試類型別成績・調査報告

2001年度入学 (2年生)	上位100名					下位100名				
	1～ 50位	51～ 100位	計	比率		最下位 50名	計	比率		
				類型別	全体			類型別	全体	
A方式	24	17	41	18.1	6.8	19	17	36	15.9	6.0
B方式	4	11	15	11.7	2.5	14	12	26	20.3	4.3
後期	4	2	6	26.1	1.0	4	2	6	26.1	1.0
A O	9	12	21	26.9	3.5	3	2	5	6.4	0.8
学業	9	7	16	23.5	2.7	1	0	1	1.5	0.2
スポーツ	0	0	0	0	0	6	13	19	48.7	3.2
T G	0	1	1	2.6	0.2	3	4	7	18.4	1.2

2002年度入学 (1年生)	上位100名					下位100名				
	1～ 50位	51～ 100位	計	比率		最下位 50名	計	比率		
				類型別	全体			類型別	全体	
A方式	26	25	51	21.1	8.4	18	19	37	15.3	6.1
B方式	5	9	14	9.7	2.3	15	19	34	23.4	5.6
後期	2	1	3	27.3	0.5	2	0	2	18.2	0.3
A O	9	6	15	19.0	2.5	2	2	4	5.1	0.7
学業	7	8	15	22.4	2.5	3	1	4	6.0	0.7
スポーツ	1	1	2	5.1	0.3	6	4	10	25.6	1.7
T G	0	0	0	0	0	4	5	9	42.9	1.5

表5 2003年度の成績

2000年度入学 (4年生)	上位100名					下位100名				
	1～ 50位	51～ 100位	計	比率		最下位 50名	計	比率		
				類型別	全体			類型別	全体	
A方式	20	24	44	16.4	6.3	24	16	40	14.9	5.8
B方式	12	6	18	11.0	2.6	10	16	26	15.9	3.7
後期	3	3	6	23.1	0.9	2	4	6	23.1	0.9
A O	6	5	11	18.6	1.6	2	1	3	5.1	0.4
学業	9	12	21	28.4	3.0	1	2	3	4.1	0.4
スポーツ	0	0	0	0	0	1	6	7	16.3	1.0
T G	0	0	0	0	0	10	5	15	25.0	2.2

2001年度入学 (3年生)	上位100名					下位100名				
	1～ 50位	51～ 100位	計	比率		最下位 50名	計	比率		
				類型別	全体			類型別	全体	
A方式	24	21	45	19.8	7.5	22	17	39	17.2	6.5
B方式	6	7	13	10.2	2.2	15	15	30	23.4	5.0
後期	3	2	5	21.7	0.8	2	2	4	17.4	0.7
A O	7	11	18	23.1	3.0	2	3	5	6.4	0.8
学業	10	7	17	25.0	2.8	3	1	4	5.9	0.7
スポーツ	0	0	0	0	0	3	6	9	23.1	1.5
T G	0	2	2	5.3	0.3	3	6	9	23.7	1.5

2002年度入学 (2年生)	上位100名					下位100名				
	1～ 50位	51～ 100位	計	比率		最下位 50名	計	比率		
				類型別	全体			類型別	全体	
A方式	28	22	50	20.7	8.3	15	19	34	14.0	5.6
B方式	3	6	9	6.2	1.5	19	16	35	24.1	5.8
後期	1	3	4	36.4	0.7	1	0	1	9.1	0.2
A O	7	7	14	17.7	2.3	1	2	3	3.8	0.5
学業	10	11	21	31.3	3.5	0	1	1	1.5	0.2
スポーツ	1	0	1	2.6	0.2	13	5	18	46.2	3.0
T G	0	1	1	4.8	0.2	1	7	8	38.1	1.3

まず、表4、表5から明らかなのは、どの年度、学年をとってみてもスポーツ推薦、T G推薦による入学者の成績が悪いことである。このことは従来から指摘されてきたことだが、成績下位100名に占める比率を見る限り、スポーツ推薦、T G推薦の各類型別入学者に占める比率は高い。とりわけスポーツ推薦では、最も高い場合、その類型の入学者の約50%近くが下位100名に存在している。また逆に、成績上位100名にはほとんど登場しない。

次に注目すべきは、B方式の入学者の成績である。成績下位100名に占める比率でみると、本来の選抜方式であったA方式を除けば、人数的には常に最多である。また、成績上位100名に占める人数では、A O入試や学業推薦を下回っている。さらに、成績上位者よりも下位者の人数の方がはるかに多いのもB方式の特徴である。こうしたことから、B方式の入学者の成績は総じて悪いと言えることができる。なお、2科目型入試による入学者という意味ではB方式と同じ後期入学者も、成績はB方式と同様であることも付言しておく。

今回の成績調査で明らかとなったことの一つに、A O入試による入学者の成績が概して良好ということがあった。成績上位100名に約20%が登場し、下位には5%ほどしか登場していなかった。A O委員による地道な努力の成果があらわれていると言えることができよう。

4. 入試類型別原級留め者数

ここまでの結論は、B方式、スポーツ推薦、T G推薦による入学者の成績が概して悪いということであった。このことを原級留め者数と関連させて確認しておこう。

原級留めとは、2年から3年に進級できない学生をいう。経済学科の進級規定では、教養教育科目、外国語科目、専門教育科目から52単位を取得しないと原級留めとされる。なお、卒業に必要な単位は124単位である。

2002年度、2003年度の原級留め者を入試類型別に調査した。その結果は、表6、表7に示されている。これらの表から、原級留め者の大部分がB方式、スポーツ推薦、T G推薦による入学者であるこ

とがわかる。とりわけ、スポーツ推薦による入学者は原級留めとなる比率が高い（2002年度17名、39.5%，2003年度16名、41%）ばかりか、一度原級留めになった学生が再度原級留めとなる比率（17名のうち10名が再度原級留めになっている）が非常に高いことが分かる。なお、この点については一層の時系列データを充足する必要がある。

表6 2002年度原級留め者数とその比率（人数・%）

2000年度入学		類型別	全体
A方式	35	13.1	5.0
B方式	39	23.8	5.6
後期	2	7.7	0.3
A O	8	13.6	1.2
学業	3	4.1	0.4
スポーツ	17	39.5	2.4
T G	15	25.0	2.2
総計	119		17.1

表7 2003年度原級留め者数とその比率（人数・%）

2001年度入学	類型別	全体	2000年度入学	再原留め率	総計	全体	
A方式	23	10.1	3.8	8	22.9	29	4.0
B方式	15	11.7	2.5	11	28.2	26	3.6
後期	3	13.0	0.5	0	0	3	0.4
A O	8	10.3	1.3	0	0	8	1.1
学業	2	2.9	0.3	1	33.3	3	0.4
スポーツ	16	41.0	2.7	10	58.9	26	3.6
T G	7	18.4	1.2	3	20.0	10	1.4
総計	74		12.3	33	27.7	107	14.9

（注）2001年度入学者数：601名、前年度原級留め者数：119名 計720名

5. むすび

これまでの調査から明らかになったことは、入試類型別にみると、B方式、スポーツ推薦、T G推薦による入学者の入学後の成績が概して悪いということであった。このことが全体としての経済学科の学生の質を大きく引き下げていると言っても過言ではなかろう。したがって、こうした入試類型の入学者を削減することが重要である。そこで、まず最初に即座に実行できる提案は、B方式の入試を止めることであった。このことは入試管理委員会の決定を経て、2005年度入試より廃止された。T G推薦については、定員（推薦枠）を実際の入学者数にあわせた形に削減するとともに、推薦レベルを引き上げることが必要であろう。スポーツ推薦の定員については未だ何も論じられていない。しかし、経済学科が、他学科・他学部に比べ大きな割合でスポーツ推薦を引き受けている現状をみると、全学的にバランスのとれた配分がなされることが望ましいと考えられる。

付論 総合演習 I について

学生の質的低下が著しく進行している中で教育そのものが成り立たない現実があるものの、入学させた以上、教育機関としての大学としては責任を持ってそうした学生を一定のレベルに達するように訓練しなければならない。これをどう実現するかが最大の難問である。そのために経済学科では、2000年度の新カリキュラムから新入生（1年生）に「総合演習 I」という必修の入門科目を少人数（20人程度）のクラスとして用意し、これを全教員が担当することにした。

この講義では、直接に専門的な学問を取り扱うことはせず、大学生活や勉強の仕方、資料の探し方など学生自身が大学に来て勉強することが少しおもしろいと感じることができるようなことを中心内容としている。コミュニケーションを重視しやや高校の延長にあるクラスとして、学生自身が何か発見してくれることを期待しての科目でもある。クラス編成（30クラス）に際しては従来のグループ枠を取り払い、すべてのグループの学生が各クラスに集まるように工夫した。このことでグループを越えた人間関係の形成も期待された。

2003年5月、この講義に対するアンケート調査を2、3年生を対象に行ったので、簡単に報告しておきたい。アンケートの回収数は、2年生は264（在籍者604名の43.7%）、3年生は233（在籍者583名の40%）、合計497であった。質問項目は「経済学科1年生の必修科目として「読む、聞く、書く、話す」ことの強化に重点を置いた『総合演習 I』があります。あなたは、この科目を受講してどのよう感じましたか。率直にあなたの感想を書いて下さい。」というものであった。

この問いに対して「よかった」、「役に立った」、「楽しかった」など肯定的に評価した回答は、2年生では203（76.9%）、3年生では175（75.1%）、合計で378（76.1%）であった。具体的に学生の意見を拾ってみると、「最も好きな科目だ」、「総合演習は生徒が作業することが多いので意欲的に臨めた。絶対に役に立つ授業だ」、「とても自分のためになった。何よりも一番大切な授業だと思った」、「とても素晴らしいと思いました。毎回総合演習の授業が楽しみで、そのために大学に通っていると言っても過言ではありません」、「かなり力がついた気がする」、「主体的に学べる『場』でした。それは学校ではなく『大学』という空間だった」、「もっとこのような授業を増やして意見交換できる場を持った方が『大学の授業を受けたい』という気持ちになると思う」、「他の学生の様々な意見が聞けてとても刺激になった。自分の知識のなさがわかり勉強してみようという気にもなった」、「とても有意義な講義であった。先生と生徒が積極的に討論できるところがよかった」、「他のどの講義よりも大学らしい講義だと思った。また一番受けがいのある講義だった」といったものが目についた。こうした意見から考えると、約4分の3の学生が大講義では受けることのできない「学ぶ」感覚を獲得したと思われる。

他方、「つまらなかった」、「おもしろくなかった」などの否定的評価は、2年生で61（23.1%）、3年生で58（24.9%）、合計で119（23.9%）であった。この否定的な意見には、「ただ本を読むだけでつ

まらなかった」、「意図が分からない授業で、退屈だった」というような講義内容・方法について再考を迫るものがあった。また、担当教員間で内容に大きな相違があり不公平感を訴える意見もあった。それは、他の学生に比べ自分が簡単で楽な講義を受けていて鍛えられていないことに対する不満を表すものであった。その意味では、多くの学生は多かれ少なかれ一定程度鍛えられたいという希望を持っていると推察できる。したがって、学生を一定のレベルに引き上げるためには、どの教員が担当しても一定同一の内容を獲得できるような講義内容に関する統一を図ることが必要であると言えよう。そのためにも、この講義の基本線を描いたテキストを経済学科教員によって作成することが急務と言えるかもしれない。

さらに、否定的な意見の中で注目すべきものが存在した。それは、「他の学生のレベルが低く簡単でつまらなかった」というものである。学生のレベルの低下が進行していることは事実だが、一方で一定レベル以上の学生が少なからず存在することも事実である。このことは、偏差値で輪切りにされ同じようなレベルの学生しか存在しないと言われる首都圏の大学と本学が大きく異なる点である。それゆえ、そうした「優秀な」学生を早期に発見し、いかに育てるかも大きな課題である。

ともあれ、試行錯誤でスタートした1年生向けの「総合演習Ⅰ」は、各教員の努力もあって学生の4分の3に支持されてきており、その充実こそ急務となっている。また、こうした「少人数教育」の充実こそが教育効果を上げる一番の近道である*。したがって、成績調査とあわせて、こうした学生の声を聞くアンケート調査を継続的に実施しながら、教育効果を測定し、それを一定反映させた学科課程の策定や講義内容の充実を図ることが今後ますます重要であると考えられる。

*そうした意味で、3年生からの「演習」には多くの「やる気のある」学生が挑戦できるように各教員が門戸を広げておくことが重要と考え、登録学生数の最下限を15名に設定している。